

言語少数派高校生の日本及び自己の捉え方は どう変わるか

—文化祭展示への日本人フィードバックに注目した M-GTA による分析—

西岡 あや

1. 研究背景

近年のグローバル化の影響で、日本に滞在する外国の人々が増え、学校にも外国籍の子供達が増えている。文部科学省の「日本語指導が必要な外国人児童生徒数」によれば、平成 19 年度における公立の小・中学校・高等学校で日本語指導が必要な外国人児童生徒数は、前年比 13.4 パーセント増の 25,411 人で、過去最高となった。このうち高校生は 1,182 人だが、ここには私立の全日制、定時制、通信制高校のデータは含まれておらず、日本語指導が必要な外国籍高校生の数は、実際にはもっと多いと考えられる。今後も日本の高校に外国籍の子供達が増えることは必至である。

2. 先行研究

2.1 言語少数派高校生¹についての研究

小・中学生以下の年少者に比べ、高校生についての研究は大変少ない。川上 (2006) は、独自の評価スケールで外国人集住地区の高校生の 4 技能を判定した。蘇 (2008) は、日本語の読解授業にへアによる協働学習を取り入れた実践研究である。また広崎 (2003) は、高校の日本語指導員としての経験から、高校卒業後の進路保障を視野に入れた日本語教育の必要性を説いている。

2.2 学校現場における日本語教室

太田 (2000) は、学校現場における日本語教室を周りの社会から隔絶したエスニック・エンクレーブであると指摘している。エスニック・エンクレーブとは、ある社会の中に、民族的背景を同じくする者同士が集まって形成された社会のことである。それは、縫部 (1999) も言うように、子供達にとっては、在籍級の同化圧力から逃れ、同郷の仲間と母語で語り合え、ホスト社会への不満を安心して吐き出せる場として精神衛生上重要な意味を持つ。

しかし、閉ざされたエスニック・エンクレーブのままでは、少数派の悩みが日本人に共有されず、両者間の誤解や偏見が修正されず助長される恐れもある。

3. 研究の意義と研究目的

3.1 研究の意義

言語少数派の子供達が、日本というホスト社会で健やかに成長し、社会の一員となって自己実現を果たしていくためには、自己や自文化、ホスト社会に対して肯定的な態度を持つことが不可欠である。それには、教科の補習や受験指導という観点の他に、生徒の全人格の育成を視野に入れた教育が必要である。しかし、高校での日本語教育において、このような視点に立った実践研究は、管見の限りない。

3.2 研究目的

以上を踏まえ、次の 2 点を本研究の目的とする。

- ① 生徒の全人格の育成という視点から日本語教育実践を行う
- ② 学校教育における日本語教室の新たな可能性を探索する

4. 活動内容

具体的な活動は、文化祭を利用して少数派高校生が日本人に一番伝えたいと切実に感じていることを展示発表し、学校内外の日本人見学者からアンケートによるフィードバックをもらうというものである。制作準備は、2008 年 7 月 24 日から 9 月 3 日の 8 日間（文化祭：9 月 5 日、6 日）で、はじめの授業で活動についてのブレインストーミングを行い、韓国人生徒が「韓国の国旗と国歌」について、中国人生徒が「北京の新世界」について展示をすることになった。制作は生徒同士の協働作業を重視し、グラフィックデザインなど生徒の得意技能も活かして自由に制作してもらった。

5. 研究課題

言語少数派高校生の自己及び日本社会の捉え方が、日本人見学者のフィードバックによってどのように変わるのか、という点に注目し、次の二つを設定した。

RQ1: 言語少数派高校生は、文化祭展示発表以前に、自己及び日本社会をどのように捉えていたか

RQ2: 言語少数派高校生は、文化祭展示発表に対する日本人見学者フィードバックにより、自己及び日本社会をどのように捉えたか

6. ホーリスティック教育理論

本研究ではホーリスティック教育の考え方を参考にした。これは、哲学者ジャン・スマッツの「ホーリズム」という概念を、教育学者のジョン・ミラーが教育理論として発展させたもので、最大の特徴は「繋がり」を重視する点である。『宇宙を構成する全ての生命は、関連し合い、繋がり合っている』と考え、人間と他の生命、人間と人間、人間と環境、人間と自然が互いに深く関わり合い繋がり合っていると考える。この理論を日本語教育へ取り入れた縫部は、日本語を学ぶことを通して、①論理的思考と直感の繋がり、②心と身体の繋がり、③自己と教科の繋がり、④様々な教科の繋がり、⑤個人とコミュニティの繋がり、⑥自我と自己の繋がり、⑦自己と他者の繋がり、などの多様な繋がりにより学習者が気づき、その繋がりによって深く関わることで、学びを深化させることができるとしている。本研究をこの「繋がり」という点から捉えると「日本人に一番伝えたいこと」とは、③の「自己と教科」、得意技能を活かした作品作りは④の「様々な教科」、地域社会に向けて発信することは、⑤の「個人とコミュニティ」、見学者フィードバックによる自己やホスト社会を捉え直しは⑥の「自我と自己」、展示作品の協働制作は⑦の「自己と他者」の、それぞれの繋がりとして捉えることができる。

7. 研究方法

メタ研究方法として、西條の構造構成的質的研究法(SCQRM)を用いた。SCQRMとは、西條が提唱する構造構成主義を理論的基盤とする質的研究法で、

中核となるのは、関心相関性という概念である。関心相関性とは、「存在・意味・価値」は、主体の「身体・欲望・目的・関心」と相関的に規定されるという原理で、これを研究に置き換えると、研究を構成する要素である認識論や理論、フィールド、対象者、技法、結果の「価値」は、研究者の関心や研究目的によって規定されるということになる。SCQRMをメタ研究方法とする本研究では、フィールド、対象者、分析方法を本研究の目的に照らして、関心相関的に選択した。

7.1 フィールド・対象者

フィールドは、Z県にある全校生徒960名の全日制普通科の公立X高校である。筆者は日本語指導員として2008年4月よりX高校に勤務し、6名の外国籍生徒のうちBとJの日本語クラスを担当している。本研究の対象はこのBとJである。

表1 対象者のプロフィール

名前	性別	年齢	学年	国籍	家庭内言語	来日時の年齢	滞日年数
B	男	16歳	高1	韓国	韓国語	13歳	3年
J	男	19歳	高2	中国	中国語	16歳	3年

7.2 分析方法・データ

分析方法には、木下(2003)のM-GTAを用いた。文化祭前のデータには、7月24日の授業中の発話を文字化したものを使用した。授業内容は、文化祭企画についてのブレインストーミングである。文化祭後のデータは、個別の半構造化インタビューを文字化したもので、インタビューの途中で、生徒に日本人見学者のアンケートを手渡して読んでもらい、反応について注目した。

8. 分析結果と考察

分析の結果、26の概念が生成され、それをカテゴリに統合した結果、1つのコア概念と9つのカテゴリ、4つのサブカテゴリが生成された。

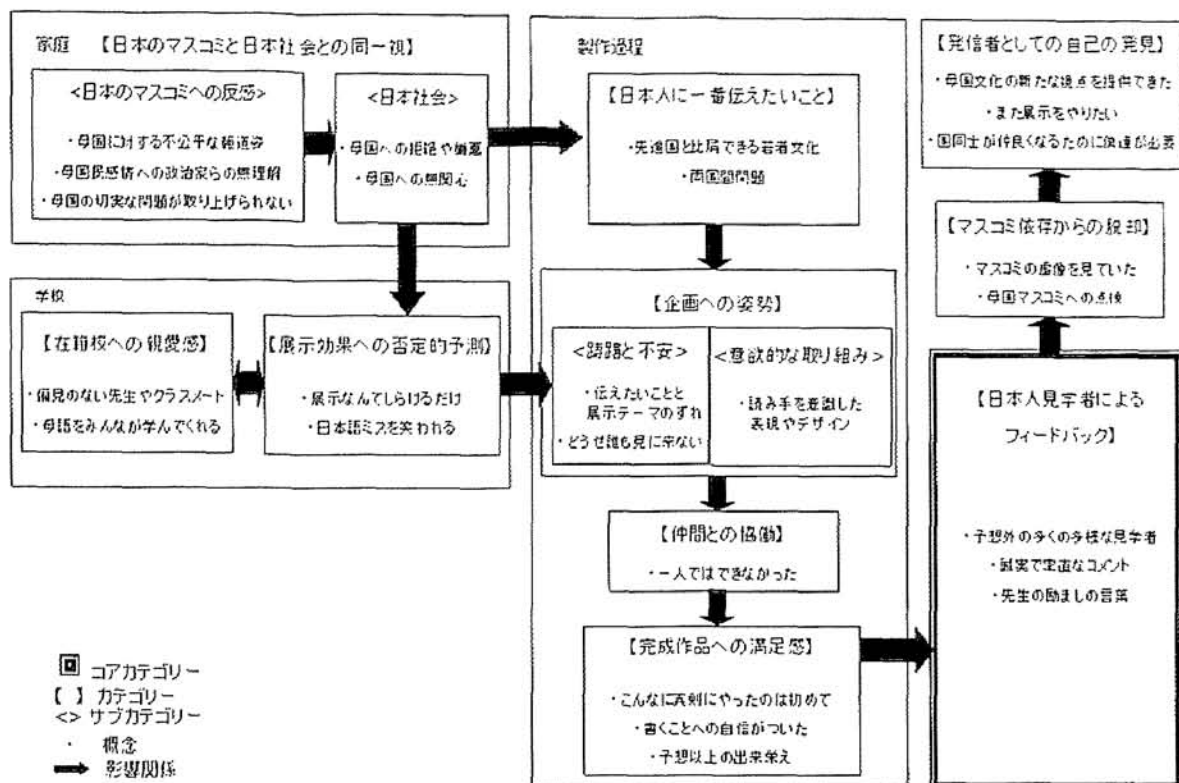


図1 言語少数派高校生の自己及び日本の捉え方における変容プロセス

上図の左端から矢印に沿ってストーリーラインを述べる。

文化祭前において、少数派高校生は、テレビなどを通じて、母国に対する不公平な報道姿勢や母国民感情への政治家らの無理解、母国の切実な問題が取り上げられないと感じく日本のマスコミへの反感>を感じている。その影響で、母国への拒絶や嫌悪、無関心を＜日本社会>から受け取っている。このことから、少数派高校生は【日本のマスコミと日本社会とを同一視】していると推察される。一方、学校では、偏見のない先生やクラスメートに囲まれ、母語をみんなが学んでくれる環境に【在籍校への親愛感】を感じている。しかし文化祭展示の企画には、展示なんてしらけるだけという周囲の否定的な反応や日本語ミスを笑われる懸念から【展示効果についての否定的予測】をしている。この予測には＜日本社会>の影響が考えられる。

制作においては、【日本人に一番伝えたいこと】として、先進国と比肩できる若者文化、日本と母国の両国間問題をそれぞれ選んだ。【企画への姿勢】には、伝えたいことと展示テーマのずれ

や、どうせ誰も見に来ないといった躊躇や不安>を抱く一方、読み手を意識した表現やデザインに気を配る＜意欲的な取り組み>とが共存し、一人では出来なかったことも【仲間との協働】によって成し遂げられ、サポートした側も自身の学びの糧となった。それは、こんなに真剣にやったのは初めてという深い学びの実感となり、書くことへの自信や出来映えについて【完成作品への満足感】を得る結果となった。

展示には、予想外の様々な見学者が、誠実で率直なコメントや励ましの言葉をくれた。このような【日本人見学者によるフィードバック】は、少数派高校生にとって、自分も日本人もマスコミの虚像を見ていたことの発見となり、母国マスコミへの点検を促し、それまでの【マスコミ依存からの脱却】を生んだ。そして、自分の展示が、母国文化の新たな視点を日本人に提供できたと実感し、また展示をやりたいと思い、国同士が仲良くなるために伝達が必要との認識に至った。これは、少数派高校生にとって【発信者としての自己の発見】を意味する。

次に研究課題を考察する。

RQ1:言語少数派高校生は、文化祭展示発表以前に、自己及び日本社会をどのように捉えていたか

文化祭展示発表以前において、言語少数派高校生は、日本のマスコミと日本社会とを同一視し、日本のマスコミの母国に対する否定的評価に規定されていた受け身的な自己であったと言える。日本のマスコミに対する反感をそのまま日本社会へと投影し、その影響を自己や母国に対する周囲の無関心や否定的評価として受け止めていた。

RQ2: 言語少数派高校生は、文化祭展示発表に対する日本人見学者フィードバックにより、自己及び日本社会をどのように捉えたか

見学者のフィードバックによって、少数派高校生は、自文化、日本社会に対する客観的な視点を獲得し、マスコミ依存から脱却した主体的な自己へと大きく変化した。また、日本の人々に対する母国文化の媒介者、発信者としての自らの存在意義を見いだした。これは、ホスト社会における肯定的な自己認識と言える。

9. まとめと今後の課題

分析の結果、①生徒の全人格の育成という視点から日本語教育実践を行う ②学校教育における日本語教室の新たな可能性を探索する という本研究の2つの目的については、一定の成果があったと言える。また、ホーリスティック教育の有効性については、最も表現したいことを重視し、得意技能を生かすこと、学び合い助け合う関係を築くことが、生徒の学びの深化に大きく関わっていることが研究結果によって示唆された。

しかし、この研究は2名の少数事例によるもので、得られた結果は限定的である。また文化祭は一回性のものであり、子供の人格的成長に寄与したという点においても、やはり限定的と言わざるを得ない。また、この実践で個々の子供の個性や自発性を十分に活かし切れたとは言えない。今後も引き続き同じフィールドで継続的に研究を行い、事例を増やすことで結果の妥当性を検証する必要がある。また子供をよく観察し、長い視点で子供

の成長を見ていくことが必要である。

注

1. 清田 (2005) は「圧倒的な日本語環境の中で生活し学んでいる、日本後以外の言語を母語とする子どもたち」を言語少数派と定義している。

参考文献

- 太田晴雄 (2002) 「ニュー・カマーの子供と日本の学校」 国際書院
- 川上郁雄 (2006) 「高校レベルのJSL生徒の日本語教育を考えるーJSLバンドスケールによる日本後能力調査を踏まえてー」 早稲田大学日本語教育研究センター紀要 第19号, 13-31
- 木下康仁 (2007) 『グランド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』 弘文堂
- 清田淳子 (2005) 『外国語科教育と日本語教育を統合し、母語を活用した内容重視のアプローチの可能性の追求ー言語少数派子供達に対する教科学習支援の方法の構築』
- 志水宏吉・編著 (1998) 『教育のエスノグラフィーー学校現場のいま』 雄略野書院
- 蘇 位静 (2008) 『言語少数派高校生は協働的読解活動にどう参加するかー言語能力の有無に焦点を当ててー』 平成 19 年度 お茶の水女子大学人間文化研究科言語文化専攻日本語教育コース 修士論文
- 西條剛央 (2007) 『ライブ講義・質的研究とは何か SCORM ベーシック編』 新曜社
- 西條剛央 (2008) 『ライブ講義・質的研究とは何か SCORM アドバンス編』 新曜社
- 広崎純子 (2003) 『公立高校における日本語指導の位置づけ』 拓殖大学日本語紀要 135-143
- 縫部義憲 (1999) 「人国児童のための日本語教育」 スリーエーネットワーク
- 縫部義憲 (2003) 「ホーリスティックアプローチと日本語教育理論(1) 世界観・教育哲学を中心に」 広島大学日本語教育研究 13, 9-11
- 縫部義憲 (2005) 「ホーリスティックアプローチと日本語教育理論(2) 繋がりという概念を中心に」 広島大学日本語教育研究 15, 15-22
- ミラー, ジョン著 手塚郁恵訳 (1994, 1997) 「ホーリスティック教育」 春秋社

にしおか あや/お茶の水女子大学大学院修士

aya.nishioka@gmail.com